

日蓮大聖人御書全集

せいちょうじだいしゆちゆう

清澄寺大衆中

新版
1206
ゝ
1209

せいちようじだいしゅちゅう
清澄寺大衆中

けんじ ねん がつ にち さい
建治 2 年 ('76) 1 月 11 日 55 歳
せいちようじちゅう
清澄寺知友

しんしゅん けいが
新春の慶賀、自他幸甚、幸甚。
じ たこうじん こうじん

こぞきた

さだ

しさいあ

さんけい

去年来らず、いかん。定めて子細有らんか。そもそも、参詣

くわだ

そうら

いせこうのごぼう

じゅうじゅうしんろん

ひぞうほうやく

に

を企て候わば、伊勢公御房に十住心論・秘蔵宝鑰・二

きようろんとう

しんごん

しよ

しやくようそうら

しんごんし

教論等の真言の疏を借用候え。かくのごときは、真言師

ほうき

ゆえ

もう

しかん

だいいち

だいに

ごずいしんそうら

蜂起の故にこれを申す。また、止観の第一・第二、御隨身候

とうしゅん

ふしようにき

そうろう

えんちぼう

みでし

え。東春・輔正記なんどや候らん。円智房の御弟子に

かんちぼう

も

そうろう

しゅうようしゅう

貸

給

そうら

観智房の持つて候なる宗要集、かしたび候え。そのの

みならず、ふみの候文　そうろうよし　ひとびともう　そうら由も人々申し候いしなり。そうそう　かえ早々に返

すべきのよし申させ給え。由　もう　たま

今年ことし　こと　ぶつぽう　じやしよう　糾は殊に仏法の邪正たださるべき年か。とし　じようけんのごぼう浄顕御房、

義城房等には申し給うべし。じようじようぼうとう　もう　たも

日蓮にちれん　たびたびせつがいが度々殺害せられんとし、ならびに二度まで流罪せ

られ、頸くび　はを刎ねられんとせしことは、別べつ　せけん　とが　そうらに世間の失に候わ

ず。

生身しようじん　こくうぞうぼさつ　だいちえ　たまの虚空蔵菩薩より大智慧を給わりしことありき。

「日本第一の智者となし給え」にほんだいいち　ちしや　たま　もう　ふびん　おぼと申せしことを不便とや思

みようじよう

だいほうしゆ

たま

みぎ

そで

しめしけん、明星のごとくなる大宝珠を給わつて右の袖

そうら

ゆえ

いつさいきよう

みそうら

はつしゆう

にうけとり候いし故に、一切経を見候いしかば、八宗な

いつさいきよう

しやうれつ

し

らびに一切経の勝劣、ほぼこれを知りぬ。

うえ

しんごんしゆう

ほけきよう

うしな

しゆう

だいじ

その上、真言宗は法華経を失う宗なり。これは大事な

じよぶん

ぜんしゆう

ねんぶつしゆう

びやつけん

せ

おも

り。まず序分に禅宗と念仏宗の僻見を責めてみんと思ふ。

ゆえ

がつし

かんど

ぶつぼう

じゃしよう

お

その故は、月氏・漢土の仏法の邪正はしばらくこれを置く、

にほんこく

ほけきよう

しやうぎ

うしな

いちにん

ひと

あくどう

お

日本国の法華経の正義を失つて、一人もなく人の悪道に墮

しんごんしゆう

かげ

み

したが

やまやまてらでら

つることは、真言宗が影の身に随うがごとく、山々寺々ご

ほつけしゆう

しんごんしゆう

相 添

によほう

ほけきよう

とに法華宗に真言宗をあいそいて、如法の法華経に

じゆうはちどう

せんぼう

あみだきよう

くわ

てんだいしゆう

がくしゃ

十八道をそえ、懺法に阿弥陀経を加え、天台宗の学者の

かんじよう

しんごんしゆう

しyou

ほけきよう

ぼう

灌頂をして真言宗を正とし法華経を傍とせしほどに、

しんごんきよう

もう

にぜんごんきよう

うち

けごん

はんにや

おと

真言経と申すは爾前権経の内の華嚴・般若にも劣れるを、

じかく

こうぼう

めいわく

ほけきよう

おな

慈覚・弘法これに迷惑して、あるいは「法華経に同じ」、あ

すぐ

もう

ほとけ

かいげん

ぶつげん

るいは「勝れたり」なんと申して、仏を開眼するにも仏眼・

だいにち

いん

しんごん

かいげんくよう

にほんこく

もくえ

大日の印・真言をもつて開眼供養するゆえに、日本国の木画

しよぞう

みな

むこん

むげん

もの

けつく

てんまい

か

の諸像、皆、無魂・無眼の者となりぬ。結句は天魔入り替わ

だんな

ぶつぞう

おうぼう

っ

って、檀那をほろぼす仏像となりぬ。王法の尽きんとする、

これなり。

あくしんごん

鎌

倉

きた

にほんこく

この悪真言、かまくらに來つて、また日本国をほろぼさ

うえ

ぜんしゅう

じょうどしゅう

もう

言

んとす。その上、禅宗・浄土宗などと申すは、またいう

びやつけん

もの

ばかりなき僻見の者なり。

もう

かなら

にちれん

いのち

な

ぞんち

これを申さば必ず日蓮が命と成るべしと存知せしかど

こくうぞうぼさつ

ごおん

報

けんちようごねんしがつ

も、虚空蔵菩薩の御恩をほうぜんがために、建長五年四月

にじゅうはちにち

あわのくにとうじようのごう

せいちようじ

どうぜん

ぼう

じぶつどう

二十八日、安房国東条郷の清澄寺、道善の房、持仏堂の

なんめん

じようえんぼう

もう

もの

しやうしやう

だいしゆ

南面にして、浄円房と申す者ならびに少々の大衆にこれ

もう

のちにじゅうよねん

あいだ

たいてん

もう

を申しはじめて、その後二十余年が間、退転なく申す。あ

ところ

おい

るざいとう

むかし

き

るいは所を追いだされ、あるいは流罪等。昔は聞く、

ふきようぼさつ

じようもくとう

いま

み

にちれん

とうけん

あ

不軽菩薩の杖木等を。

今は見る、日蓮が刀剣に当たること

を。

にほんこく

うち

むち

じようげばんにん

い

にちれんほつし

いにしえ

日本国の有智・無智、上下万人の云わく「日蓮法師は、古

ろんじ

にんし

だいし

せんとか

勝

にちれん

の論師・人師・大師・先徳にすぐるべからず」と。日蓮こ

ふしん

晴

しょうか

ぶんえい

おおじしん

だいちようせい

の不審をはらさんがために、正嘉・文永の大地震・大長星

み

かんが

い

わ

ちよう

ふた

だいなん

を見て勘えて云わく「我が朝に二つの大難あるべし。い

じかいほんぎやくなん

たこくしんぴつなん

じかい

かまくら

ごんのだいぶどの

わゆる自界叛逆難・他国侵逼難なり。自界は鎌倉に権大夫殿

ごしそん 同士 討

しゅつたい

たこくしんぴつなん

しほう

御子孫どうしうち出来すべし。他国侵逼難は四方よりあるべ

なか

にし

強

責

ぶつぼう

し。その中に、西よりつよくせむべし。これひとえに、仏法

いつこくこぞ

よこしま

ぼんてん

たいしやく

たこく

おお

が一国挙つて邪なるゆえに、梵天・帝釈の他国に仰せつ

責

にちれん

もち

けてせめらるるなるべし。日蓮をだに用いぬほどならば、

まさかど

すみとも

さだとう

としひと

たむら

しょうぐん

ひやくせんまんにん

将門・純友・貞任・利仁・田村のようなる将軍、百千万人

かな

実

しんごん

ねんぶつとう

ありとも叶うべからず。これまことならずば、真言と念仏等

びやつけん

しん

もう

そうら

の僻見をば信ずべし」と申しひろめ候いき。

きよすみさん

だいしゆ

にちれん

ふぼ

さんぼう

なかんずく清澄山の大衆は、日蓮を父母にも三宝にも

思落

たま

こんじよう

びんぐ

こつしや

たま

おもいおとさせ給わば、今生には貧窮の乞者とならせ給い、

ごしよう

むけんじごく

お

たも

ゆえ

後生には無間地獄に堕ちさせ給うべし。故いかんとなれば、

とうじようのさえもんかげのぶ

あくにん

きよすみ

飼

鹿

とう

狩

取

東条左衛門景信が悪人として清澄のかいしし等をかりとり、

ぼうぼう ほうしとう ねんぶつしや しよじゆう

房々の法師等を念仏者の所従にしなんとせしに、日蓮敵

りようけ

方 人

きよすみ

ふたま

にか

てら

をなして領家のかとうどとなり、「清澄・二間の二箇の寺、

とうじよう

かた

付

にちれん

ほけきよう

東条が方につくならば、日蓮、法華經をすてん」と

精 誠

きしよう

にちれん

ごほんぞん

みて

結

付

せいじようの起請をかいて、日蓮が御本尊の手にゆいつけ

祈

いちねん

うち

りようじ

とうじよう

て

離

そうら

ていのりて、一年が内に両寺は東条が手をはなれ候いし

なり。

こと

こくうぞうぼさつ

捨

たも

だいしゆ

この事は、虚空蔵菩薩もいかでかすてさせ給うべき。大衆

にちれん

こころ得

思

ひとびと

てん

捨

も、日蓮を心えずにおもわれん人々は、天にすてられたて

もう

ぐち

もの

われ

呪

まつらざるべしや。こう申せば、愚癡の者は、「我をのろう」

もう

ごしよう

むけんじごく

お

ふびん

もう

と申すべし。後生に無間地獄に堕ちんが不便なれば申すな

り。

りようけ

あま 御 前

によにん

ぐち

ひとびと

言

脅

領家の尼ごぜんは女人なり。愚癡なれば、人々のいいおど

そうろう

おん

ひと

せば、さこそとましまし候らめ。されども恩をしらぬ人と

ごしよう

あくどう

お

たま

ふびん

そうら

なりて、後生に悪道に堕ちさせ給わんことこそ不便に候え

ひと

にちれん

ふ ぼ とう

おん

被

ひと

ども、また一つには日蓮が父母等に恩をかぼらせたる人な

ごしよう

助

祈

れば、いかにしても後生をたすけたてまつらんとこそいの

そら

り候え。

ほけきよう

もう

おんきよう

べつ

そうら

われ

か こ

法華經と申す御經は別のことも候わず。「我は過去

ごひやくじんてんごう

さき ほとけ

しやりほつとう

みらい

ほとけ

五百塵点劫より先の仏なり。また舍利弗等は未来に仏に

成

しん

もの むけんじごく

お

なるべし」と。「これを信ぜざらん者は無間地獄に墮つべし。

われ

もう

たほうぶつ

しょうみよう

じつぼう

しょぶつ

我のみこう申すにはあらず。多宝仏も証明し、十方の諸仏

した

出

そうろう

じゆせんがい

もんじゆ

かんのん

ぼんてん

も舌をいだしてこう候。地涌千界・文殊・観音・梵天・

たいしゃく

にちがつ

してん

じゆうらせつ

ほけきよう

ぎようじや

しゆご

たま

帝釈・日月・四天・十羅刹、法華經の行者を守護し給わ

と

ほとけ

みち べつ

様

ん」と説かれたり。されば、仏になる道は別のようなし。

かこ

こと

みらい

こと

もう

そうろう

ほけきよう

過去の事、未来の事を申しあてて候が、まことの法華經に

そうろう

ては候なり。

にちれん

筑

紫

み

蝦夷

いっさいきよう

日蓮は、いまだつくしを見ず、えぞしらず。一切經をも

かんが

そうら

あ

おのおの

つて勘えて候えば、すでに値いぬ。もししからば、「各々

ふち おん ひと

むけんじごく

お たも

もう そうろう

不知恩の人なれば、無間地獄に堕ち給うべし」と申し候は、

違 そうろう

いま

のち

御 覧

にほんこく

たがい候べきか。今はよし、後をござらんぜよ。日本国は

とうじ

壱 岐

つしま

そうら

とき

当時のゆき・対馬のようになり候わんずるなり。その時、

あわのくに

蒙 古

よ

せ

そうら

とき

にちれんぼう

もう

こと

安房国にむこが寄せて責め候わん時、「日蓮房の申せし事

あ

もう

へんしゅう

ほつしとう

くち

むけん

の合うたり」と申すは、偏執の法師等が口すくめて無間

じごく

お

ふびん

ふびん

地獄に堕ちんこと、不便なり、不便なり。

しょうがつじゅういちにち

正月十一日

日蓮

花押

にちれん

かおう

あわのくにせいちようじだいしゅちゅう

安房国清澄寺大衆中

文

佐渡どの

助

阿闍梨ごぼう

こくぞう

このふみは、さど殿と、すけあざり御房と、虚空蔵の

みまえ

だいしゅ

読

聞

たま

御前にして、大衆ごとによみきかせ給え。